

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル: Effect of nausea and vomiting during pregnancy on mother-to-infant bonding and the mediation effect of postpartum depression: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル: つわりによる対児愛着への影響と産後うつとの媒介効果: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 千葉ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: BMC Pregnancy and Childbirth

2023年: DOI: 10.1186/s12884-023-06014-5

筆頭著者名: 楊 貴

所属 UC 名: 千葉ユニットセンター

目的:

対児愛着とは、親が子どもを大切に思う情や気持ちのことである。つわりは、妊娠初期の妊婦の約50~90%に発症し、妊婦の精神的健康や産後うつと関連するという報告があるが、つわりの対児愛着への影響を調べた研究は少ない。本研究では、つわりと対児愛着との関係、およびその関係への産後うつとの関与について検討した。

方法:

つわりの程度(つわりなし、軽度のつわり、中程度のつわり、重度のつわり)は、妊娠中に質問票を用いて評価した。対児愛着は、赤ちゃんへの気持ち質問票を用いて、産後1年の時点で評価した。産後うつは産後1か月時点で評価した。つわりの程度と対児愛着の関係について、多重ロジスティック回帰分析により解析を行った。つわりが対児愛着に及ぼす影響は、産後うつを介したものであるかどうかを調べるために、媒介分析を行った。

結果:

多重ロジスティック回帰分析の結果、中程度および重度のつわり群はつわりがない群に比べ、対児愛着障害のリスクが減少した。媒介分析の結果、つわりがある群では産後うつへの傾向が強くなり、それを通じて子どもへの愛着が弱くなるという関連が認められた。逆に、つわりから対児愛着への直接的な影響(産後うつを介さない効果)については、つわりのある群(軽度、中程度、重度)では愛着が強まるという関連が認められ、総合的な効果として、つわりが重い群で愛着が強くなる効果が見られた。

考察(研究の限界を含める):

本研究では、つわりの経験自体は母親の子どもへの愛着を強める効果があるが、つわりの後に産後うつへの傾向が強まることで、子どもへの愛着が弱くなるという影響もあることが明らかとなった。このことから、母親から子どもへの愛着を強めるためには、早期に母親へのケアを行い、産後うつへのリスクを減らすことが重要と考えられた。本研究の限界として、つわりの程度は自記式質問票により評価し、客観的な評価を行っていない。また、対児愛着の程度は評価時期により変化する可能性があり、経時的な評価が必要であるが、本研究は1時点のみで評価していることがあげられる。

結論:

対児愛着障害のリスクは、中程度および重度のつわりを経験した母親では減少したが、つわりの後に産後うつへの傾向が強いと、子どもへの愛着が弱まるという関係が認められた。母親の子どもへの愛着を強めるためには、母親へのケアにより産後うつを予防することが重要と考えられる。